

国 語

注 意

1. 問題は全部で13ページである。
2. 解答用紙は(その1)(その2)がある。(その1)はマーク・シートになっている。
3. 解答用紙に氏名・受験番号を忘れずに記入すること。(ただし、マーク・シートにはあらかじめ受験番号がプリントされている。)
4. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
5. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけない。
6. 解答用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

マーク・シート記入上の注意

1. HBの黒鉛筆またはシャープペンシルを用いて記入すること。
2. 解答用紙にあらかじめプリントされた受験番号を確認すること。
3. 解答する記号・番号の○を塗りつぶしなさい。○で囲んだり×をつけたりしてはいけない。

解答記入例(解答が1のとき)

1	<input checked="" type="radio"/>	<input type="radio"/> 2	<input type="radio"/> 3	<input type="radio"/> 4	<input type="radio"/> 5	<input type="radio"/> 6	<input type="radio"/> 7	<input type="radio"/> 8	<input type="radio"/> 9	<input type="radio"/> 0
---	----------------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------	-------------------------

4. 一度記入したマークを消す場合は、消しゴムでよく消すこと。×をつけても消したことになる。
5. 解答用紙をよごしたり、折り曲げたりしないこと。

— 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

近代における女の生を考える上で、問題とされるのは妻と母という性役割であろう。おそらく二〇世紀初頭においては、一人の女といえばまず妻であり母であった。女は「妻」であり「母」であることによって、はじめて地位と権力を与えられ「女」としての存在を認められたといつてもよいだろう。ここでは、天職であるときえ言われた「妻」であり「母」であることで規定される女の在り方を「役割母性」と名づけてみたい。つまり「夫のために」「子供のために」という A のもとに、その権力を発揮するよ
うな母性である。

岡本かの子の文学は「母性の文学」とも言われるが、かの子の作品において「役割母性」はすべて否定的に扱われている。たとえば「母子抒情」における規矩男の母親子は、つつましげで、自分自身の欲望などはまったくもたないような顔をしながら、大学を出ること、いい会社に就職すること、いい嫁をもらうことを子供におしつける。子供の資質や気持ちを少しも理解しようとしな
いこの母親を、かの子をイメージさせる「かの女」は「ただ卑屈で形式的な平安を望むつまらない母親」と語る。また「河明り」には、子供の心を握ろうとして争う産みの親と育ての親の激しいエゴの衝突が描かれている。これらは、子供の心を自分のものにする
ことによって、母親としての誇りと満足を得ようとする母親像で、かの子はそこに、愚かで哀れな母の姿をみる。この母親という名のもとに女のエゴをむき出しにし、自己の欲望を子供におしつける母性愛が「役割母性」である。

これらの母親と対照的に描かれるのが「丸の内草話」の「私」であり、「かの女の朝」の「かの女」である。「丸の内草話」の母親は、会社員として処世術を身につけていく息子をみて「息子よ、あはれ」と涙ぐむ。ここには功利的な母親の意識は皆無である。人間として生きていくことの非情さ、生きていかなければならない悲しみに共感できる母がいる。

子供は世の人々が言ひ尊ぶやうに無邪気なものと逸作もかの女も思つては居なかつた。(略)恥や遠慮を知る大人を無視した横暴な存在主張者だ。(逸作もかの女も、自分の息子が子供時代を離れ、一つの人格として認め得た時から息子への愛が確立したのだ。)

ここには、子供を母親の所有物と見るのではなく、自分と対等に向かい合う他者として捉えることのできる母がいる。亀井勝一郎は『やがて五月に』について「で、岡本かの子を日本において初めて『恋人と母性』を一身に調和させた作家だと論じている。恋人と母性を調和することができたのは、かの子に子供と母親は他者であるという認識があったからであろう。

「やがて五月に」の藍子、「生々流転」の蝶子、「女体開頭」の奈々子にみられる一人の男だけにではなく、多くの男女に影響を与え、その存在を引き受けてゆく女を、かの子は「ウール・ムッター」(根の母)と名づけるのだが、このような女の存在は本来、何に根ざしているのだろうか。ここではこうした恋人と母性の両面をそなえ、他の存在をも引き受ける女の在り方を「純粹母性」と名づけて考えてみよう。

「純粹母性」の原型は、初期の作品「鬼子母の愛」に認められる。「鬼子母は人の子を見ると食べたくなる」。可愛がるだけでは物足りなく「直接に子供を自分の愛感の中へ取入れて仕舞」たいと欲するのである。それは自分の子供たちに対する過剰な愛を、他人の子供を食べるという代償行為によってしか表現できないからである。過剰な愛とは、抑えることのできない欲動でもある。鬼子母にとって自分の子供は、現実に現れた自分自身の絶対存在とみなされ、他人の子とは根本的に異なる者である。それ故に食べたいという欲望も起こらない。「生れてから野竹のやうに、自分一途に伸びて居た鬼子母の心」は、子を喪った母親の悲しみを知ることもない。それが自分の子供を喪うことよって初めて、子を思う母親の気持ちすべて同じだということを知り。これまでの自分の罪を償うには、自分の子供は自己の一部であるという意識を改め、他人の子も自分の子も一人の他者として認め、平等に愛さなければならぬとする認識に至るのである。こうして生まれ変わった鬼子母は、子授けの神となる。

『ぐいぐい引き廻せる勝手放題の愛し方の出来るわが兒といふものを失つたのは実に寂しい。しかし世間中の子供をみな自分に繋ぐ事が出来るやうになつたのは、本当に賑やかで福々しい事だ』

自分の存在がすべてを包むことができるという感慨は自己陶醉的ともいえようが、わが子だけに対する母性でなく、世間中の

子供、さらには生きているものすべてを包み込んでゆく母性は、かの子文学の中心をなすモチーフである。さらに、子授けの神となった鬼子母には、「救済されるべき人間」が「救済する人間」になり得るといふ **B** がみられる。「救済する人間」、これも「純粹母性」の要素である。

「救済する人間」の造型には、かの子の実体験も投影されていると思われる。その背景について、瀬戸内晴美の「かの子繚乱」や熊坂敦子の「年譜」などを見よう。

かの子は漫画家の岡本一平と一九一〇年に結婚した。だが二人の結婚生活は、生活意識の違いや一平の放蕩生活、かの子の早稲田の学生であった堀切茂雄との恋愛などで一九一三年頃から軋み始めていたようである。さらに長女豊子、次男健二郎の死などが重なり、かの子は神経に異常をきたすまでにシヨウモウし、荒廃した生活からの救いを宗教に求めていく。とくに『歎異抄』の「善人なおもて往生を遂ぐ、いわんや悪人をや」の思想に共鳴し、「煩惱即菩提」や「一切衆生悉有仏性」などの他力本願の仏教に自己救済の道を見出していく。煩惱多き身は祈ることによってのみ救われ、完全な自己を形成しうる。さらにその救われた自己は、他人にも救済を及ぼすことができる。その思想を受け入れていくことによってかの子の生活は安定していった。

「煩惱即菩提」という宗教観を内面化することによってかの子は、「救われるべき存在」から「救うべき存在」への転換を遂げたようである。その変身の子兆はすでに「鬼子母の愛」の鬼子母像にあった。新しく生まれ変わった「かの子」は鬼子母と共振し、**C**「としての「自己」」を獲得していったようである。かの子は「芸術家の務めは客観世界と自分の主観世界とを一致させることを最も忠実にすると同時に巧みにすること」だと語り、さらに「主観も客観の中に溶け込めるもの」であると述べている。いうまでもなく主客合一は仏教における到達点であるが、岡本かの子の語る「主客合一」には、自己が世界を包むという、ある意味ナルシスティックな陰影も感じられる。しかし、その一方で、かの子の小説には作家の主観をおし通すことによって、「私小説」の域を超えた「純粹母性」を体現する女性が創造されている。主観を徹底化させることによって独自の客観的な文学世界を創りあげていったと言えるだろう。

（与那覇恵子『後期20世紀女性文学論』より）

*鬼子母ニ鬼子母神(キシモジン・キシボジン)。もと夜叉の娘で、千人の子を産みながら他人の子を奪って食べ、のち釈迦に戒められて仏道に帰依し、安産と幼児保護の神となったとされる。

問一 空欄 A に入れるのに最適な語句を、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 1。

- ① 現実逃避 ② 一知半解 ③ 大義名分 ④ 認識不足 ⑤ 人道主義

問二 傍線部 a「つつましげで、自分自身の欲望などはまったくもたないような」とあるが、作者はこれをどのような態度と考えているか。該当する最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 2。

- ① 理性 ② エゴ ③ 誇り ④ 卑屈 ⑤ 覚醒

問三 傍線部 b「かの子はそこに、愚かで哀れな母の姿をみる」とあるが、それはなぜか。理由として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 3。

- ① こどもは母親の所有物ではないのに、それに気づかず自己満足にひたっているから。
② 母親はこどものためには、その愛情も切り捨てなければならぬときがあるから。
③ 母としてのエゴや欲望は、けっきょく自分のこどものためのものでしかないから。
④ こどもは母親離れをしていくものと知りながら、それでも溺愛してしまうから。
⑤ 母の愛情は一方的にそそがれるもので、こどもはそれに応える存在ではないから。

問四 傍線部 c「息子よ、あはれ」とあるが、なぜそう思うのか。説明として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **4**。

- ① 処世術を身につけていく息子が、すでに自分の思い通りにならない存在だと虚しかったから。
- ② 無邪気だった息子が一人前の大人として世に出ていく姿に、母親としての悲哀を感じたから。
- ③ 会社員となって生きる息子を待ち受ける人生の非情さに、彼が耐えられるか心配だから。
- ④ 横暴な存在主張者であった息子が、大人社会のなかで自暴自棄にならないか不安だから。
- ⑤ 息子を自分と対等な他者としてとらえ、人間として生きていくことの悲哀を共感しているから。

問五 傍線部 d「鬼子母は人の子を見ると食べたくなくなる」とあるが、その理由として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **5**。

- ① 他人の子どもへの愛情表現を知らなかったから。
- ② 自分の子どもへの過剰な愛の代償行為だったから。
- ③ 母親に共通する動物的な欲動を押さえられなかったから。
- ④ 自分の子より可愛い他人の子の存在を許せなかったから。
- ⑤ 子を喪った人間の母の悲しみを鬼ゆえに知らなかったから。

問六 傍線部 e「一途」の「途」と同じ読みの語句を、次の①～⑤から一つ選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **6**。

① 方途 ② 途中 ③ 途絶 ④ 途端 ⑤ 三途

問七 傍線部 f「自己陶酔的」と同じ意味の一語を最終段落から抜き出せ。解答用紙(その2)を使用。

問八 空欄 **B** に入れるのに最適な語句を、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **7**。

- ① 世界観の転換 ② 対立の構図 ③ 相対的關係 ④ 相乗効果 ⑤ 極端な対応

問九 傍線部 g「シヨウモウ」を漢字で記せ。解答用紙(その2)を使用。

問十 空欄

C

に入れるのに最適な語句を、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は

8。

① 援護者

② 宗教者

③ 救済者

④ 認識者

⑤ 求道者

問十一 傍線部h「私小説」の例として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は

9。

① それから

② 五重塔

③ 城の崎にて

④ たけくらべ

⑤ 高野聖

二 次の文章は、源頼朝が源義仲と不和になり、交渉して和平したことに就いて述べたものである。読んで後の問に答えよ。

* 兵衛佐は、木曾引き退く由聞きて、「木曾が引き退かむを、追ひかかりて討つほどの誤りなし。さるにても、使者を立てて、

義仲が言はん口をも聞かむ」とて、「頼朝が言はむ詞、すこしも違はず木曾に言ひつべからむ使者をつかはさばや」と宣ひければ、北条四郎申しけるは、「伊豆国住人天野藤内遠景

A

、さやうの事も心えて口もきき、さかざかしき者にて候へ」と

計らひ申しければ、遠景を召して、兵衛佐宣ひけるは、「木曾の次郎にあひて言はむやうはよな、『平家、内には違勅の族也、外

には相伝の敵也。しかるに今、頼朝彼等を追討すべき院宣をうけたまはる。あに生涯の天恩にあらずや。且うは君を敬ひ奉り、

且うは家を思ひ給はば、尤も合力あるべき所也。一族の儀を忘れて平家と同心せらるる由、漏れ承る間、実否を承らむが為

に、是まで参向する所也。十郎蔵人の言はむ事に付きて、頼朝を敵とし給ふか。さもなくては、蔵人を是へ歸し給へ」と申さるべ

し。『歸さじ』と申さば、『御辺は公達あまたおはず也。成人したらむ子息一人、頼朝にたべ。一方の大將軍にもし候はむ。頼朝

は成人の子も持ち候はねば、かやうに申し候ふ也。かれをもこれをも子細を宣はば、やがて押し寄せて勝負を決すべし』と、た

しかに言ふべし。一面に負けて言はぬか言ふか、たしかに聞け」とて、足立新三郎清経といふ雑色をさしそへて遣はしけり。

天野藤内罷り向かひて、面もふらず、こしもおとさず、兵衛佐の詞の上におのれが詞をさしくはへて、つまびらかにぞ言ひた

りける。木曾是を聞きて、根井・小室の者共を召し集めて、『我が心にて、我が身の上の事は、はからひにくきぞ。是はからへ』

と言ひければ、郎等共一同に申しけるは、「日本国は六十余ヶ国と申すを、わづかに二十余ヶ国こそ、源氏は打ち取り給ひた

れ。今四十余ヶ国は平家のままにて候ふ。打ちあけたる所もなく、鎌倉殿と木曾殿と御中違はせ給ひなば、平家の悦びにてこ

そ候はむずらめ。蔵人殿『歸らじ』と候はば、何か苦しく候ふべき、清水の御曹司を鎌倉殿へ渡しまゐらせ給へかし」と申しけれ

ば、木曾が乳母子今井四郎進み出でて申しけるは、「おそれにて候へども、各々あしく申し給ふ物かな。弓矢を取るならひ、後

日を期する事なき者を。つひとしては、御中よかるべしとも覚え候はず。多胡先生殿をば、悪源太殿打ちまゐらせてましませ

ば、『つひに親の敵と思ひ給ふらむ』と、鎌倉殿は思ひ給ふらむ。いかさまにも、一度、戦は候はむずらむものを。ただ、事のついでに御返事したたかに仰せられ返して、一戦して、御冥加の程をも御覽せよかし」と言ひければ、木曾是を聞きて、「今井は乳母子也。根井・小室は今參也。乳母子が言はむ事に付きて、是等が言ふ事を用ゐずは、定めて恨みむず。又かれらにすてられなば、あしかりなむ」と思ひて、生年十一歳に成る清水冠者義基をよびよせて、「人の子をわぎみほどまでそだてて、他人の子になすべきにてはあらねども、十郎藏人は帰らじと宣ふ。わぎみをやらすは、ただ今、兵衛佐と中違ひぬべし。なにかはくるしかるべき。いそぎ兵衛佐殿の方へ行け。果報なからむには、一所に有りとてても叶ふまじ。冥加あらば、所々に有りとて、それにもよるまじ。とくとく出で立つべし」と言ひければ、清水冠者心細くは思ひけれども、子細を言ふべき事にあらねば、母や乳母にいとまを乞ひて出で立ちけり。

清水冠者、同年に成りける海野小太郎重氏・産小屋太郎行氏と言ひける者をぞ付けたりける。道すがら泣きければ、「いかにかくはわたらせ給ふぞ。をさなければ、弓矢の家9に生まれぬれば、さは候はぬものを。いかにかくはわたらせ給ふぞ」と申しければ、義基かくぞ言ひける。

わがきつる道の草葉やかれぬらむあまりこがれて物を思へば
と言ひたりければ、重氏

おもふには道の草葉もよもかれじなみだの雨のつねにそそげば¹⁰

[注]

(延慶本『平家物語』による)

*兵衛佐 源頼朝。源義朝の三男。

*木曾 源義仲。通称木曾義仲。源義賢の次男で、頼朝には、いとこにあたる。

*北条四郎 北条時政。頼朝の妻であった政子の父。

*十郎藏人 源行家。頼朝・義仲の叔父。一時期は頼朝のもとにいたが、その後敵対し、義仲に保護されていた。

*雑色ざつしき 雑用に当たる召使い。

*根井・小室 源義仲に従った信州(現長野県)の武士たち。

*鎌倉殿 源頼朝を指す。

*清水の御曹司 清水冠者義基(「義高」などとも)。義仲の長男。

*乳母子 乳母に育てられた主君の子と、乳母の実子の関係。実の兄弟のように育てられ、親しい関係にあった。

*多胡先生 源義賢。源為義の次男で、義朝の弟。義仲の父。源義平に討たれた。

*悪源太 源義平。源義朝の長男で、頼朝の兄。

問一 空欄

A

に入れる言葉として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 10。

- ① ぞ ② こ そ ③ な む ④ ならば ⑤ にては

問二 傍線部1「さかさかしき」に漢字をあてるとすれば、どのような字がよいか。最適なものを、次の①～⑤から選び、記号を

マークせよ。解答欄番号は 11。

- ① 賢賢しき ② 坂坂しき ③ 逆逆しき ④ 性性しき ⑤ 細細しき

問三 傍線部2「御辺」は、二人称代名詞である。文中にはもう一つ、相手一人を指す二人称代名詞が用いられている。それを探

して書き抜け。解答用紙(その2)を使用。

問四 傍線部3「たべ」の説明として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 12。

- ① 「手べ」。自分が手塩にかけて育てようという意味だが、心の中では義仲の子の命をねらっている。
② 「食べ」。共に暮らそうではないかという意味だが、実際には自分の跡継ぎにしておもうとねらっている。
③ 「賜べ」。養子として自分にかけてほしいという意味だが、実質的には、人質として差し出せという意味である。
④ 「他べ」。よそに出してほしいという意味で、いったん自分が預かってから他の家に渡してしまおうと思っている。
⑤ 「耐べ」。ここは耐えてほしいという意味で、義仲に一時的な忍耐を要求し、それによって和平したいと願っている。

問五 傍線部4「足立新三郎清経といふ雑色をさしそへて遣はしけり」とあるが、この人物は何のために派遣されたのか。最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **13**。

① 天野藤内遠景の身に危険がないよう、身辺を護衛するため。

② 天野藤内遠景が敵に討たれた場合、代わって使者の役を務めるため。

③ 天野藤内遠景が、十郎藏人行家を連れて帰る場合に、手助けするため。

④ 天野藤内遠景が、頼朝の言葉を正確に伝えるかどうか、確認するため。

⑤ 天野藤内遠景は信頼できないので、実質的には清経に使者の役をさせるため。

問六 傍線部5「つまびらか」に漢字をあてるとすれば、どのような字がよいか。最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **14**。

① 美らか

② 平らか

③ 妻らか

④ 滑らか

⑤ 詳らか

問七 傍線部6「我が心にて、我が身の上の事は、はからひにくきぞ」とは、どういう意味か。最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **15**。

① 自分自身の将来のことを、自分で占うようなことは困難である。

② 自分自身の身辺に関わるような問題については、自分では判断しにくいものだ。

③ 自分の一身上の問題は、自分自身で考えたからといって、そのとおりに実現するものではない。

④ 自分の身分に関わるようなことを、自分自身で決めてしまつては不都合である。

⑤ 自分の身の安全に関わることを自分自身で計画するには限界がある。

問八 傍線部7「いかさまにも、一度、戦は候はむずらむものを」とは、どういう意味か。最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **16**。

- ① うそをついてでも、一度、戦いがあると言わなければならないでしょうか。
- ② どういうわけか、一度、戦いが起きると予想する者がおります。
- ③ 一体どなたが、戦いになるだろうなどとおっしゃるのですか。
- ④ どうしても、結局、一度戦わないわけにはいかないでしょうか。
- ⑤ どうなるにせよ、戦いは一度も起きない方がよいはずではないでしょうか。

問九 傍線部8「定めて恨みむす」は、誰が誰を恨むだろうというのか。最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **17**。

- ① 根井・小室が義仲を恨むだろう。
- ② 今井四郎が義仲を恨むだろう。
- ③ 義仲が根井・小室を恨むだろう。
- ④ 義仲が今井四郎を恨むだろう。
- ⑤ 根井・小室や今井四郎が義仲を恨むだろう。

問十 傍線部9「弓矢の家に生まれぬれば、さは候はぬものを」とは、どういう意味か。最適なもの、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **18**。

- ① 武士の家に生まれていたら、こんなに泣いたりはしないのかもしれませんが。
- ② 武士の家に生まれていたら、泣いてもしかたないところですが。
- ③ 武士の家に生まれたのですから、そんなに泣くものではありませんよ。
- ④ 武士の家に生まれたのですから、それほど泣いているわけではありません。
- ⑤ 武士の家に生まれていたとしても、これほど泣いたりはしなかったでしょう。

問十一 傍線部10「よもかれじ」の説明として最適なもの、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **19**。

- ① 「離れてゆくことはないでしょう」の意。清水冠者義基が、「故郷を離れる悲しさに、道の草葉も自分から離れてゆくように思われる」と言ったのに対して、「常に降り注ぐ涙の雨で、草葉とあなたはいつもつながっていますよ」と返した。
- ② 「世間から離れはしないでしよう」の意。清水冠者義基が、「故郷から離れるために、道の草葉からも世間からも遠ざかってしまう気がする」と言ったのに対して、「涙の雨が降り注いでいる限り、世間から離れはしませんよ」と返した。
- ③ 「乾くことはないでしょう」の意。清水冠者義基が、「木枯らしのようにさびしい物思いの風で、道の草葉が乾いてしまっただろう」と言ったのに対して、「いつも涙の雨が降り注いでいるから、乾くことはないでしょう」と返した。
- ④ 「軽くなることはないでしょう」の意。清水冠者義基が、「自分の物思いによって枯れた道の草葉は、乾いて軽くなってしまっただろう」と言ったのに対して、「涙の雨がいつも降り注いでいるから、濡れて重みが増していますよ」と返した。
- ⑤ 「枯れたりほしくないでしょう」の意。清水冠者義基が、「自分の焦がれるような物思いで、道の草葉が枯れてしまっただろう」と言ったのに対して、「涙の雨がずっと降り注いでいるから、枯れはしませんよ」と返した。

問十二 この文章の内容に合う文として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 20。

① 義仲は、自分の親しい乳母子の主張を採用して新参者の意見を取り入れないようでは、今後うまくいかないだろうと判断して、子息の清水冠者を頼朝のもとに差し出すことを決意し、供を付けて送り出した。

② 頼朝は、義仲には重大な罪があるわけではないので、なんとかして戦いを避けねばならないと考え、和平交渉を一任することができる判断力に富んだ重臣を使者に選び、念のために雑色を添えて義仲のもとに送った。

③ 頼朝は、義仲に対して使者を送り、平家と同心するか、十郎藏人行家を頼朝のもとに帰すか、成人した子息を一人、頼朝の子にするか、三つのうちどれか一つを選ぶように要求した。

④ 義仲は、頼朝は親の敵であると思っていたので、いつかは戦わねばなるまいと覚悟していたが、現在の戦力では頼朝と戦うことはできないと判断し、和平のために子息の清水冠者を頼朝のもとに送ることにした。

⑤ 頼朝と義仲は、互いに親の敵にあたる間柄なので、結局は戦うことになると思っていたが、今自分たちが戦うならば平家を利するだけだと考え、協議を重ねた結果、和平するという結論に達した。

